

シンデレラ・ コレクション



Tsurumi University Library
鶴見大学の貴重書を展示します

Cinderella

平成29年10月17日(火)～10月31日(火)

[会場] 鶴見大学図書館1F エントランス

[時間] 平日8時50分～20時00分 土曜8時50分～18時00分
日曜閉館

ただし、紫雲祭期間中の10月22日(日)は展示のみ催行
(10時00分～16時30分)

はじめの言葉

おそらく『シンデレラ』の物語を知らない人はいないでしょう。不思議な魔法、華やかな舞踏会やきれいなドレス、継母や義姉たちにいじめられているシンデレラが王子と結婚するというハッピー・エンディングの結末ですから、一度触れると一生忘れることのない物語になるかもしれません。そして自分自身の「シンデレラ・ストーリー」をそれぞれに夢見ることがあるかもしれません。本や絵本で読んでも、映画などの映像で観ても実に楽しい物語です。最近ではこの『シンデレラ』をウォルト・ディズニーの絵本や映画で初めて触れた人がとても多いようです。なかにはこの『シンデレラ』はディズニーのオリジナル・ストーリーであると思っている人もいるという話も耳にするようになりました。ディズニーの映画がアメリカで上映されたのは 1950 年のことで、すでに半世紀を優に越していますからそう思うのも無理もないかもしれません。この作品は現代まで広く読み続けられていますが、それにはディズニーが大きい役割を果たしたことは言うまでもありません。しかしその影響も大きなものがあります。舞踏会はもともと2回開かれますが、ディズニーでは1回しか開かれないなどの改作が行われているからです。その理由にはさまざまなことが考えられますが、上演時間が長くなるのを避けたかっただけではなく、シンデレラがときどき見せる「自己中心的なところ」を描きたくなかったのかもしれませんが。シンデレラは最初の舞踏会から帰ってきた義姉たちにドレスを貸してくれませんか？とお願いをしますが、断られてホッとする姿を見せます。そもそも、最初の舞踏会に出かける前に、シンデレラはこんな汚れた洋服で行かなければならないのですか？とはっきりと主張します。なかなかしつかりしたお嬢さんだったように思えます。しかし、これも美しいものを純粋に追及する女性の姿ととらえれば、それほど気にならないかもしれません。少なくともディズニーでは素直な女性として描きたかったことがうかがえます。また、「シンデレラ物語」とは「玉の輿」物語と違っていらっしゃる方が多いかもしれません。これも実はそれほど大きな逆転ではなく、実際にはジェントルマン(gentleman)である父親の娘ですから、もともと貴族や貴族に準じた身分であったということになります。1697年の『ペロー童話集』ではGentilhommeの単語が使われています。伝承文学にしばしば見られることが指摘されていますが、大きな社会秩序の変化は見られないという部分が秘められた作品でもあります。一般に「シンデレラ・ストーリー」という言葉が先行してしまい、『シンデレラ』＝「玉の輿」物語とのイメージがありますが、現代の読者はそうした社会的な背景をあまり意識しないままに読んで観て、そして製作者側も描いてきたのかもしれませんが。時代の変化とともに解釈の変化が起こることはよくあることですし、多様な見方・解釈ができるその自由さや寛大さも文学作品が持つ魅力のひとつかもしれません。

この『シンデレラ』は「民話」に属し、世界中に同じような類話が見つかる大きな物語群を形成しているもので、現在私たちが見聞きする作品はそのうちのひとつと見なされています。その物語群は細部に渡って分類がなされ、「シンデレラ・サイクル」という専門用語が存在するほどです。「継子いじめ」としては日本にも類話がたくさんありますし、一番古いものとしては、中国に残されているという研究もあります。

『シンデレラ』は、ディズニーの影響もあり、日本ではもっとも有名な昔物語のひとつで、老若男女を問わず、絶大な人気を博しています。しかし、日本人が一般に見聞きする『シンデレラ』は、フランスの文人シャルル・ペロー(Charles Perrault, 1628 —1703)が民話や昔物語を語り直した『童話集』の中にある『サンドリヨン』(「シンデレラ」は英語訳からのもので、もともとの原文のフランス語では、「サンドリヨン＝灰まみれの少女」となります)に起源をもつ作品であることはあまり知られていないかもしれません。また、この物語にはもともと本文に続いて「教訓」が二つ置かれています。そのことを知る人も多くはないかもしれません。今日では『ペロー童話集』や『ペローの昔ばなし』などと「ペロー」の名前を冠した作品には「教訓」も付けられることが多いようですが、『シンデレラ』となると「教訓」が付けられることはほとんどありません。

今回の『シンデレラ』の貴重書展では、その始まりのペローからディズニーまでどのような作品が作られてきたのかそのおおよその変遷を知ることができるようになっています。実に多くの作品がさまざまな形式で出版や製作がなされてきました。これまでの作品すべてを網羅しているわけではありませんが、『シンデレラ』が人々に知られるようになっていく

まさに初期の頃の『シンデレラ』の姿を見ていただくことができますと思います。そしてそれが少しずつ、ときに大きく変化していきます。ちょっと大胆な言い方になりますが、次のような流れになるのではないかと考えます。フランス語で書かれた『ペロー童話集』が1729年にロバート・サンバーによってロンドンで英語に翻訳されます。それが、瞬く間にイギリスの地方にまで知られるようになり、あたかも自国で生まれた作品の如くイギリスで多くの人々が『シンデレラ』の物語を享受することになります。そこには今回の展示で出展される、簡易本の小冊子の「チャップブック」(3番から21番)が下支えをしました。サイズは小さいですが実に大きな働きをすることになります。このチャップブックが時代の変化と共に発展的に解消し、絵本、詩作、シェイプブック、立体的なポップ・アップやパノラマの仕掛け本、パントマイムや劇作、手に取って楽しめる人形や玩具、そしてアニメーションなどへと多様な形で現代につながってきたと考えられます。もちろん、話はそれほど単純ではなく、直線的ではないのですが、大枝を切り落としてしまえばそうした流れになるのではないかと考えます。いずれにしてもそれぞれが個性豊かで愛すべき作品ばかりです。『グリム童話集』の『灰かぶり姫』に関してはこの貴重書展ではほとんど出てきません。最近では、本当は怖い昔物語として人気がありますが、ディズニーにつながる『シンデレラ』の物語はほとんどがペローの流れになっています。

今回のシンデレラ展で出展される作品は今では入手できないものが多く、本当に貴重な作品ばかりです。特にチャップブックについてはこれほど多くの『シンデレラ』のコレクションを一か所で所蔵しているところは世界でもほとんどありません。当時はチャップマン(chapman)なる行商人・呼び売り人などによって大量に販売されたものですが、現在まで残っているものはわずかばかりとなっています。日本屈指という表現では足りずに、世界に誇れるコレクションとなっています。改めて本学図書館の歴代の図書館員のすべての方々にお礼を申し上げたいと思います。最高の見識と強固な意志と俊敏な行動力等がなければこれほどまでの立派なコレクションになることは不可能であったと思います。わざわざフランスやイギリスに行かなくても日本の横浜のこの鶴見の地でその大きな歴史の流れを見ることができます。どうぞみなさま、この機会に知っているようであまり知らない『シンデレラ』の世界をお楽しみいただけましたら幸いです。そしてもう一度子供になった気分で眺めていただければ、過ぎし日のあの楽しい思い出がよみがえってくるかもしれません。

展示品の中には見開きにして挿絵などをご覧いただけないものがあります。紙葉がバリバリで割れたり破れたりしてしまう危険性があります。本当に残念ですがご了解をいただきたいと思います。

歯学部 人文科学研究室
学内教授 木村 利夫

展示リスト

1. 『ペロー氏の物語ならびに教訓』
パリ 1724 年刊 (フランス語)
2. 『過ぎし昔の物語〜がちょうおばさんの話ならびに教訓』
ロンドン 1764 年刊 (英語とフランス語)
3. 『シンデレラのはなし、その他』
1760 年〜1790 年頃刊 (チャップブック)
4. 『美しき少女シンデレラの不思議な冒険、またはガラスのくつ』
ロンドン 1790 年頃刊 (チャップブック)
5. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』
T. コリアー リチフィールド (アメリカ、コネチカット州) 1800 年頃刊 (チャップブック)
6. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ、子供のためのはなし』
タバート ロンドン 1804 年刊 (チャップブック)
7. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』
ハワード・アンド・エヴァンズ ロンドン 1809 年刊 (チャップブック) (韻文)
8. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』
ジョン・エヴァンズ ロンドン 1810 年頃刊 (チャップブック) (韻文)
9. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』
「新・児童書選集」ロンドン 1816 年刊 (チャップブック)
10. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』
J. ケンドリュウ ヨーク 1820 年頃刊 (チャップブック) (韻文)
11. 『美しい少女シンデレラの冒険』ほか
J. ケンドリュウ ヨーク 1820 年頃刊 (チャップブック) (散文)
12. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつのはなし』
N. メリデュウ コヴェントリー 1820 年頃刊 (チャップブック)
13. 『シンデレラのおもしろいはなしとガラスのくつ』
J. G. ラッシャー バンバリー 1820 年頃刊 (チャップブック)
14. 『シンデレラのはなしと小さなガラスのくつ』
ディーン・アンド・マンディ ロンドン 1820 年頃刊 (チャップブック)
15. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつの人気のある物語のマーシャル版』
ロンドン:ジョン・マーシャル 1821 年刊 (チャップブック)
16. 『シンデレラのはなし、または小さなガラスのくつ』
ダービー:トーマス・リチャードソン 1822 年頃刊 (チャップブック)
17. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』
エジンバラ:オリバー・アンド・ボイド 1828 年刊 (チャップブック)
18. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』
H. E. フィニー クーパーズタウン (アメリカ) 1842 年刊 (チャップブック)
19. 『シンデレラのはなし』
オトリイ:ヨークシャー:J. S. パブリッシング・アンド・ステイショナリー
1850 年頃刊 (チャップブック) (韻文)

20. 『シンデレラと小さなガラスのくつ』
ロンドン:ディーン・アンド・マンディ 1846年頃刊 (チャップブック)
21. 『シンデレラのはなし、またはガラスのくつ』
グラスゴー 1850年刊 (チャップブック)
22. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』
ロンドン:C. ラウンデス 1804年刊 (韻文)
23. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』
ロンドン:S. アンド・J. フラー 1814年刊 (紙人形付き)
24. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』
ジョン・ハリス ロンドン 1825年頃刊 (韻文)
25. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』
グラント・アンド・グリフィス ロンドン 1850年頃刊 (韻文)
26. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』
グリフィス・アンド・ファラン ロンドン 1860年頃刊 (韻文)
27. 『サンドリヨン、または小さなガラスのくつ』
パリ:オド 1833年刊
28. 『シンデレラ、親指小僧と7リークの靴』
ジョージ・クルックシャンク 画 ロンドン:D. ボーグ 1853 - 54年刊
29. 『シンデレラとガラスのくつ』
ジョージ・クルックシャンク文・画 ロンドン:D. ボーグ 1854年刊
30. 『シンデレラとガラスのくつ』
ジョージ・クルックシャンク 文・画 ロンドン:G. ラウトリッジ 1860年刊
31. 『パークのシンデレラ』
ロンドン:A. パーク 1840年刊
32. 『ペローによる妖精の物語』
パリ (フランス):E. ブランシャール 1854年刊
33. 『シンデレラ』
ハンブルグ:ガスタフ W. ザイツ 1863年 - 1864年頃刊 (シェイプブック)
34. 『サンドリヨン』
パリ:ペルラン 1870年 - 1880年代刊 (フランス語)
35. 『シンデレラとおとぎばなし』
ロンドン:アーネスト・ナイスター 1870年刊
36. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』
ロンドン:キャセル、ピーター・アンド・ガルピン 1871年頃刊
37. 『シンデレラ』
ウォルター・クレイン 画 ロンドン:G. ラウトリッジ・アンド・サンズ 1874年刊
38. 『子供のミュージカル・シンデレラ』
ウォルター・クレイン 画 ロンドン:G. ラウトリッジ 1879年刊
39. 『シンデレラ』
ニューヨーク:マクローリン・ブラザーズ 1876年頃刊

40. 『小さなシンデレラとガラスのくつ』
ロンドン:ディーン・アンド・サン 1880年頃刊
41. 『子供たちのシンデレラ、または小さなガラスのくつ』
ロンドン:ディーン・アンド・サン 1881年刊
42. 『シンデレラ、四幕仕立ての妖精オペラ』
ジョン・ファーマー 音楽、ヘンリー・S・リー 文、ヘイウッド・サムナー 画
ハロウ:J. C. ウイルビー 1882年頃刊
43. 『3人の美しいプリンセスたち』
キャロライン・パターソン 画 ロンドン:マクラス・ワード 1885年刊
44. 『シンデレラと二つのギフト』
エドワール・ドウ・ボーモン 画 ロンドン 1887年刊
45. 『シンデレラ』
フィラデルフィア(アメリカ):B. ウィリムセン 1890年刊 (仕掛け本 ポップ・アップ)
46. 『シンデレラ、またはガラスのくつ』
ニューヨーク:マクローリン 1890年頃刊
47. 『シンデレラ』
ニューヨーク:マクローリン 1890年頃刊 (仕掛け絵本)
48. 『シンデレラ』
ニューヨーク:マクローリン・ブラザーズ 1891年刊 (仕掛け本 パントマイム・トイ・ブック)
49. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつとジャックと豆の木』
グレース・ライズ ロンドン: J. M. デント 1894年刊
50. 『シンデレラ』
ロンドン:ディーン・アンド・サン 1899年頃刊 (仕掛け本 ポップ・アップ)
51. 『シンデレラ』
グリフィス・アンド・ファラン ロンドン:トークエイ 1900年刊 (韻文)
52. 『シンデレラ』
ロンドン:ラファエル・タック 1905年頃刊
53. 『シンデレラと眠れる美女』
フレデリック・ウオーン ロンドン 1905年頃刊
54. 『シンデレラ』
エイミー・ステードマン 文 ロンドン:D. P. デント 1900年-1910年頃刊 (人形付き)
55. 『シンデレラ』
ロンドン:ラファエル・タック 1912年刊 (シェイプブック)
56. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』
アリス・コーバン・ヘンダーソン 訳 ブランチェ・フィシャー・ライト 画
シカゴ (アメリカ):ランド・アクナリー 1914年刊
57. 『シンデレラ』
ミルセント・ソワービー 画、ギサ・ソワービー 文 ロンドン:ホッダー&ストートン 1915年刊
58. 『シンデレラ』
アーサー・ラッカム 画、C. S. エヴァンズ 再話 ロンドン:ハイネマン 1919年刊

59. 『サンドリヨン』
アーサー・ラッカム 画 パリ:リブレリー・アシェット 1919 年刊 (フランス語)
60. 『どのようにしてシンデレラは舞踏会に行くことができたのか』
ジェシー・M・キング 文・画 ロンドン:G. T. フォーリス 1924 年刊
61. 『シンデレラ』(ザ・ソフィストケイティッド)
ホランド・ロビンソン 文、マック・ハーシュバーガー 画 私家版 1926 年刊
62. 『シンデレラとほかの妖精物語』
「ザ・ティーニー・ウィーニー・ブックス」
ロンドン:オックスフォード・ユニバーシティ・プレス 1929 年刊
63. 『シンデレラ』
マジョリー・ハーディ、エミール・C・ブラッドベリー 文
サンダスキー、オハイオ(アメリカ):ザ・アメリカン・クレヨン 1931 年頃刊
64. 『シンデレラ』
ニューヨーク:ムービー・ジェクター 1934 年頃刊
65. 『シンデレラ』
L. ワイスガード 文・画 ニューヨーク:ガーデン・シティー・パブリッシング 1938 年刊
66. 『シンデレラ』
ロランド・ピム 画
ロンドン:フォールディング・ブックス 1950 年刊 (仕掛け本 ピープ・ショー)
67. 『シンデレラ』
ロンドン:コリンズ 1954 年刊 (仕掛け本 パノラマ)
68. 『シンデレラ』
ロンドン:バンクロフト 1961 年刊 (仕掛け本 ポップ・アップ)
69. 『シンデレラ』(ウォルト・ディズニー映画版)
ロンドン:ディーン・アンド・サン 出版年不詳

シンデレラは舞踏会で履いていたガラスの靴を落してしまいます。それを王子が拾い上げますが、その「靴」とはどのような靴だったのでしょうか。今回の貴重書展のポスターやこの「解題」にあるようなかかとの高い「ハイヒール」だったのでしょうか。

(答えはこの解説のどこかに書かれています。全部読むのは大変ですから、ちょっとヒントを。少し長いですが、2番をお読みください。そして挿絵をご覧ください。)

解説

《シンデレラ展観》

1. 『ペロー氏の物語ならびに教訓』

パリ 1724 年刊 (フランス語)

これは現在『ペロー童話集』と一般に知られているフランス語で書かれた作品である。『ペロー童話集』はシャルル・ペロー(Charles Perrault, 1628 - 1703)によって 1697 年に出版されたが、本作はパリで出版された第3刷りのもので、非常に貴重な作品である。最大の特徴は挿絵がまったくないことである。1697 年の版にはそれぞれの作品に挿絵が一枚配されているが、本作にはまったく見当たらない。しかし8編の物語はすべて収められている。その中には『眠れる森の美女』、『赤ずきんちゃん』、『青ひげ』、『長靴をはいた猫』、『仙女たち』、『巻き毛のリケ』、『親指小僧』とともに今回の貴重書展の主演である『シンデレラ』と『サンドリヨン』が収められている。この『サンドリヨン』はフランス語の原文からの表記になるもので、『シンデレラ』という表記は英語訳から来るものである。「サンドリヨン」とは「灰まみれの少女」という意味である。もちろん、それぞれの作品には「教訓」が物語のあとに付いている。

本の裁断面には金箔を張り付ける「金付け」が施されている。本作はすべての裁断面に施されているので「三方金」と呼ばれるものである。豪華になるのは当然であるが、本が汚れるのを防いだり、虫の害を予防するという実用的な側面もあった。

2. 『過ぎし昔の物語〜がちょうおばさんの話ならびに教訓』

ロンドン 1764 年刊 (英語とフランス語)

これは英語とフランス語が併用して印刷されている『ペロー童話集』である。1番と同様に今日、『ペロー童話集』として知られているものであるが、フランス語から英語に翻訳された初期の頃の出版になり、皮装丁の立派な書籍である。タイトルページにはフランス語で書名が記載されているが、そのタイトルの一部にミスプリントが見られる。18 世紀の出版になるものは非常に稀で貴重な作品である。現在でも全編を収めた書物として出版されているが、その中の『赤ずきん』、『眠れる森の美女』、『長靴をはいた猫』、『シンデレラ』などは特に人気があり、単独の作品として出版され、ひとり立ちをしているように見える。そのひとり立ちに貢献したのが本展示の3番以降に続く「チャップブック」ということになる。本作や1番のような皮装丁では出版数も限られ、また高価であるために多くの一般市民の目に触れることはなかった。見開きの左ページには英語、右ページにはフランス語で物語が印刷されており、それぞれの作品ごとに一枚の挿絵が置かれ、物語の結末には昔物語ではお決まりの「モラル＝教訓」が配されている。

この 1764 年に出版された英語とフランス語の併用版には、異版が存在する。同じ本文と挿絵が使われて、出版年も同じであるが出版者が異なっている。その異版は大英図書館(British Library)で見かけたが、よく見ると挿絵の置かれている位置が違って、しかも挿絵が反転して印刷されている。反転だけではなく、所々に雑な挿絵の作りが見られ

るため、本学所蔵の本が先に出版され、それをもとにして大英図書館所蔵の本が後に作られたものであろうと推察される。大英図書館での閲覧を申し込む際の検索で、同じ書名かつ同じ出版年がヒットした。はじめは本学にあるものと同じ書物であろうと高を括って、閲覧を申し込まずにいたが、念のためと思い閲覧を申し込むと、意外な発見をすることとなり驚いたのを覚えている。改めて一次資料そのものを確かめることの重要性を再認識することとなった貴重な経験であった。

『シンデレラ』に関して触れると、1729年に『ペロー童話集』をロバート・サンバー(Robert Samber, 1682 - c. 1745)が英語に初めて翻訳した際に用いた Cinderilla というスペルを踏襲していることからでもわかる通り、サンバー版と若干の表現の違いがあるところがあるが同じ内容である。この Cinderilla というスペルに関して触れると、今日では一文字異なる Cinderella のスペルが一般に使われているが、その違いから面白い側面が見えてくることがある。チャップブックでは出版者(出版社ではなく、出版者)により異なっており、正確な出版年がわからないことの多いチャップブックの世界ではあるが、ほとんどが Cinderella のスペルを使う年代になっているときにわざわざ昔の Cinderilla のスペルを使用する出版者も出てくる。そこには著作権を無視した安価な簡易本でありながら、出版者ごとにさまざまなこだわりを持っていたことを感じさせる一面となっている。

本作にはページの最終行に一文字だけ印刷されるキャッチワードも置かれており、格調高い正式な書籍としての体裁を整えているが、よく見ると、目次にある各作品の始まるページの数字通りには作品が始まっていないというような不体裁も同居しており、先述したタイトルページに見られるミスプリントなどもあいまって、なかなか人間味あふれる作品であるとも言える。さらに加えると、タイトルページには第6版と印刷されているが、どうやらこの数字も怪しいものであり、当時の出版事情なども垣間見ることができる。参考までに、大英図書館所蔵の異版も第6版である。この類もチャップブックに踏襲されることになっており、総じて大らかな時代であった。

『シンデレラ』の挿絵について一言。主人公のシンデレラと王子を手前に配し、後方の背景に小さくお妃や踊る貴族たちを描くことで舞踏会の広間の空間の広さを感じることができる。シンデレラは体を傾け、逃げようとしながらも後ろを振り向き、脱げてしまったガラスの靴と王子に目をやっている。王子は腰をかがめ、シンデレラが落とした靴を取り上げようとしている。この舞踏会の場面とシンデレラが逃げて王子が片膝を曲げて靴を拾うスタイルは 1697年のオリジナルの『ペロー童話集』や1729年のサンバー版の『シンデレラ』と同じである。挿絵で描かれている場面は、やはり舞踏会で王子がシンデレラの落した靴を取り上げる場面である。これが『シンデレラ』の挿絵の基本形となり、後続するチャップブックにおいても頻繁に登場することになる。この「靴」については、英語では slipper という単語が使われている。これは日本人におなじみのスリッパに近いものを指すものである。挿絵をよく見ると、確かに王子が手にしている「靴」は確かに「スリッパ」に似ている。これでは脱げてしまうのも仕方がないかもしれない。舞踏会ではまわりが見とれてしまうほど王子と踊ったわけなので、都合よく逃げるときになって、しかも片方だけが脱げてしまうというのも絶妙な話である。片方だけを履いて、逃げてしまうことになるが、「かかと」がない靴、あるいは「かかと」が低い靴＝スリッパなので、それほど走るのが不自由ではなかったかもしれないと合理的に考えることも可能かもしれない。(このあたりがクイズの解答になります。ポスターやこの解題にある「ハイヒール」のようなかかとの高いものではなかったようです。あえてディズニー以上にかかとの高い「ハイヒール」を描いていただきました。) 逃げるシンデレラを王子は取り逃がしてしまうが、それがなぜなのかしらんとあれこれ考えるのも一興かもしれない。そもそもガラス製なのに踊ったり逃げて走ったりしても壊れなかったの？と疑問は尽きない。この「ガラスの靴」についても「銀りすの毛皮のスリッパ」では？という論争もあるが、「ガラスの靴」の方が不思議な世界に人をいざなってくれるように思われる。

フランス語から英語に翻訳されることになったわけであるが、義姉が舞踏会に着ていくドレスの形容をする際、フランス語版では「イギリス製の」となっているが、さすがに英語版では「フランス製の」と気の利いた変更が行われている。参考までに3番から21番までのチャップブックの作品では3番にこの表現が出てくるだけで、時代を経るごとに簡略化されていくことが理解できる。

3. 『シンデレラのはなし、その他』

1760年頃から1790年頃刊 (チャップブック) [※ 3. ～ 21. がチャップブック]

18世紀に出版された貴重なチャップブックである。『ペロー童話集』の英語訳版から『シンデレラ』の一作品が抜粋されたチャップブックである。タイトルにあるように、後編に、『乳絞り女』という作品が付属している。ページのへりが裁断されていない「耳」つきの版(アンカット版)である。そもそも、18世紀に出版されたチャップブックは現存するものが極めて少ない。版型、紙質の粗悪さ、小口木版の挿絵の素朴さなど、どれをとっても飾り気のないものだけに味わい深い。『ペロー童話集』から初めて英語に翻訳されたロバート・サンバー版(1729)や2番の1764年の出版になる書籍にある『シンデレラ』には存在する「モラル＝教訓」は本作には存在しない。しかし付属として置かれている別の物語『乳絞り女』には「モラル」が存在し、その当時の昔物語の伝統の名残を感じることができる。

挿絵の他には、文字にも注目である。一般に「長形の s」と呼ばれる文字が使われている。一見、fの文字に見えるものである。13ページでは1行目の冒頭に horses、2行目には just、4行目には promised などに使われている。この長形の s はおおよそ1800年頃まで使われており、次第に使われなくなった。チャップブックでも、その初期のものには使われていたが、1800年を過ぎたものではほとんど長形の s は使われていない。もう一度、1番や2番の18世紀の本をご覧いただくと、やはり長形の s が使われていることに気づくかもしれない。

挿絵は全部で15枚あるが、そのうち物語の展開に関係するものは半分だけである。騎馬隊のように剣を片手に、駆け巡る挿絵もあり『シンデレラ』にはどこにも見当たらない内容の挿絵が使われている。このように物語と無関係な挿絵を平気で挿入してしまうこの「おおらかさ」というのか「無造作」というのか、これこそが初期のチャップブックの醍醐味であり、面白い点である。こうした挿絵の使われ方はしばしば見られ、また同じ挿絵を別の作品に使い回すことなども行われていた。ここにも同じものがあるわね、と当時の読者もきつとクスツと笑みをうかべたことであろう。どのようにチャップブックが作られたのかを実感できる場面でもある。著作権も著作権も気にすることなく自由に、素早く作られたまさに庶民の味方本であるから手の込んだことはできなかったのであろう。しかし実際には庶民だけではなく、名の知れたお歴々もたくさんのコレクションをしていたことが知られている。

4. 『美しき少女シンデレラの不思議な冒険、またはガラスのくつ』

ロンドン 1790年頃刊 (チャップブック)

本作も『シンデレラ』単独の出版としては、もっとも初期のものである。タイトルページに記載されているのは、出版所在地と価格のみであり、この時期のチャップブックの典型的な形式である。口絵には本を読む少女が描かれ、本文末に置かれるはずの「モラル＝教訓」に代わるような内容である数行の韻文が刻まれている。現在、一般に「チャップブック」と呼ばれている名称は、以前には「ペニー・ヒストリー (penny history)」と呼ばれていたが、この作品に印刷されている価格、つまり one penny という価格が示すように、1ペニー(ほど)の価格で売られる語り本、ということになる。この「ヒストリー(history)」は現在では「歴史」の意味で使われるが、もともとは「物語」という意味で使われていた。最近では「チャップブック」という呼称が普通に使われている。「長形の s」(3番)や「つなぎ語」(catchword、または補語とも言い、次のページの初語あるいはその一部が、前のページの下部に示されている)が使われているので、古き良き伝統が残っている。

そして、タイトルの副題について一言。通常この「ガラスのくつ」のタイトルは英語では a Glass Slipper と単数形で表現されている。「くつ」は一对で使うものなので複数形で使われるのが一般的である。副題ではわざわざ単数形が使われているので、シンデレラが落してしまう「片方のくつ」を象徴的に表していることになろう。この単数形での表現は1697年の『ペロー童話集』のフランス語のときから使われているものである。フランス語も英語と同様に通常は複数形で使われる。しかしチャップブックの中には、あえて Slippers と複数形にしているものもあり、出版者たちの「こだわり」、あるいはひょっとしたら「こだわりのなさ」を感じることができる。

5. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』

T. コリアー

リチフィールド (アメリカ、コネチカット州) 1800 年頃刊 (チャップブック)

アメリカで初めて出版された『シンデレラ』のチャップブックである。英語の表題は Cinderilla で、『ペロー童話集』が英語に翻訳されたロバート・サンバー版の当初の綴りと同じになっている。活字は、「長形の s」(f に似た s) や合字が使われ、挿絵は素朴な小口木版が入られている。この挿絵は前作の4番のチャップブックを利用した挿絵となっている。反転させて、ほぼ構図は同じままに作り直している。見比べていただきたい。また、単なる読み物としてではなく、詩、アルファベットの文字、子音と母音の組み合わせのページが置かれ、子供の教育を考えた作品ともなっている。

Cinderilla の綴りを使っていること、4番のチャップブックを丸抱えで利用して作ったものであることから4番と同様にオーソドックスな物語であろうと思われるが、実は大胆な改作がなされている。なんと、このチャップブックでは魔法が使われることがない。名付け親は裕福なおばさんという設定であり、かぼちゃもネズミも登場することはない。手持ちの馬車を使わせてあげて、舞踏会に着ていくドレスは馬車の中にあるトランクの中から選ばせるという趣向である。「ガラスの靴」も「ガラスのように見える靴」と工夫が施されている。これは実にアメリカらしいもので、当時のピューリタニズムの思想や信仰を背景にした現実的で実際の解釈と考慮を経たうえでの大胆な変更がなされた珍しいチャップブックである。平気で挿絵は拝借するのに、細部にはきちんと気を配る律義さともいえるのであろうか。自由な出版のチャップブックといえども信念だけは曲げられない厳格なピューリタンのあり様の一端を覗かせる場面である。小さなサイズの子供向けの作品であるが、ある部分には吟味をかさねたのであろう。イギリスとアメリカの文化の違いを感じさせるものである。後年、同じアメリカで出版されたチャップブック(18番)では「魔法」が復活するので、その時代と共に変容する姿も楽しんでいただきたい。出版者の T. コリアー (1761 - 1842) はアメリカのリチフィールドで地元で根差した最新の情報を提供する出版業を営んだ人物であった。

6. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ、子供のためのはなし』

タバート

ロンドン 1804 年刊 (チャップブック)

19 世紀に入ると、チャップブックは小ぶりのものが増えるが、本作はその典型的な小型のサイズである。タバートは有名なチャップブックの出版者で、1804 年に『タバートの子供のためのおはなし集』という本を出版した。本作は、その『おはなし集』にある『シンデレラ』と同じものであると思われる。見どころは、タイトルページに集約されている。シャルル・ペローの作品を底本としていることが明示されていること、そしてこの版が「第 14 版」と示されていることである。わざわざシャルル・ペローの名前を出すことはないのが通例で、また「版」を記載することはチャップブックには希有なことである。特に後者の「第 14 版」という数字は怪しいものである。チャップブックはゲリラ的に作ってしまうことがあったであろうから、印刷部数の少ない別の版が存在する可能性はあるが、これまで見たことがない。しかし、銅板による繊細な 3 枚の挿絵には手彩色が施されており、それ以前の 1700 年代のチャップブックの素朴さは微塵もない。当時流行していた羽飾りもしっかりと描写されており、劇的な社会の変化を見て取ることもできる。挿絵の下部には、小さな文字で、London, Published by Tabart & Co Aug.7-1804. の文字が刻まれている。

7. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』

ハワード・アンド・エヴァンズ

ロンドン 1809 年刊 (チャップブック) (韻文)

出版者のエヴァンズは、ジョン・エヴァンズで、安価なチャップブックを多く出版した人物である。子供にとって楽しい

本やベストセラーになった本の海賊版などを出版した。本作は、そのエヴァンズがハワードと組んで出版したチャップブックである。19 世紀の出版であるが、挿絵の素朴さ、紙葉の粗悪さは前世紀のチャップブックの風合いを持ち、何とも言えない風格と風情がある。本文は『シンデレラ』には珍しく、韻文(詩)で作られている。詩行とあって分量も限られるので、物語の骨子のみが語られている。1809 年頃刊の未製本の異版(8番)や本作を利用(模倣)して作った J. ケンドリューのチャップブック(10番)と見比べていただきたい。

8. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』

ジョン・エヴァンズ

ロンドン 1810 年頃刊 (チャップブック) (韻文)

ジョン・エヴァンズは、19 世紀初頭、ジョン・ハリスとほぼ同じ時期にロンドンで活躍したチャップブックの出版者である。ハリスが 1 シリングや 1 シリング 6 ペンスと高価な本を出版したのに対して、エヴァンズは 1 ペンスや 1 ペンス半という安価なチャップブックを出版した。本作は、一枚の紙葉の表裏に印刷され、製本のための折目がつけられたものの、完成のための糸綴じがなされていない。紙葉の 2 折りを 3 回すれば、全 16 ページの本が出来上がる仕組みである。小口木版や紙葉の質を見ても、安価で庶民に手の届く読み物であったことがうかがい知れる。6 番のものと挿絵を比べると、同じ版木を繰り返し使われているために摩耗しており、鮮明さが失われているが、それだけ『シンデレラ』の作品が当時も高い人気があったことの証である。

9. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』

「新・児童書選集」

ロンドン 1816 年刊 (チャップブック)

出版者不明のチャップブックであるが、チャップブックの世界ではよくあることである。裏表紙を見ると、シリーズで多くの作品を出版していたことがうかがえる。優麗な 4 枚の銅版画が異彩を放っている。そのうちの一枚に舞踏会を逃げ去るシンデレラが描かれている。左手にガラスの靴を持ち、後ろを振り向きながら走る様子が精緻な線で描写されている。そのガラスの靴は、やはり「かかとのないスリッパ」の形状である。片方だけ履いて走るよりはよほど走りやすかったであろうと思われる。もともと、両方の靴を落してしまうと、大団円で試し履きをして逃げた女性であるとわかったあとに、さらに第二の物的な証拠となる片方のガラスの靴をシンデレラが提示することができなくなってしまう。したがって、片方だけ落ちて、もう片方は確実に持ち帰ったことを明示することはとても大切なポイントとなるものなのかもしれない。この観点からすると、この挿絵の主役はシンデレラではなく、ガラスの靴ということになる。

10. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』

J. ケンドリュー

ヨーク 1820 年頃刊 (チャップブック) (韻文)

イングランド北東部にあるヨークで出版されたチャップブックである。ケンドリューのチャップブックは、ジョン・エヴァンズのチャップブックを模倣したことで知られている。本作も同様に、1 ページ 8 行の韻文が同じで、挿絵は異なるものを作っているものの構図はほとんど同じ挿絵となっている。英語の表題には Cinderella ではなく一字異なる Cinderilla の綴りを用いている。この表記は、シンデレラ物語の起源となるフランスの『ペロー童話集』が英語に翻訳された際に使われたものである。この表記はペローの伝統的な物語を踏襲していることを示すことになるが、ハワードやジョン・エヴァンズのチャップブック(7番と8番)を模倣して作られたことを考慮すると著作権を無視していることへのためらいと懐古趣味が絡まっているようにも感じられる。本作と先の二つの作品や次の同じ出版者ながらも「散文」で書かれたチャップブックとの違いを楽しんでいただきたい。

11. 『美しい少女シンデレラの冒険』ほか

J. ケンドリュー

ヨーク 1820年頃刊 (チャップブック) (散文)

先の10番のチャップブックと同じヨークの J. ケンドリューが出版したチャップブックである。こちらは韻文ではなく散文の『シンデレラ』である。挿絵は鮮明に描かれているが、舞踏会を立ち去ろうとするシンデレラの緊迫感は伝わらない。それは王子の立ち姿が追いかけるのでもなく、靴を捨てるのでもなく、単に舞踏会でステップを踏んでいるのではないかと思われるほどである。顔の表情は3番や4番などの18世紀のチャップブックに見られるような点描に近い素朴な表現になっている。こちらも10番と同様に、シンデレラの英語のスペルは Cinderilla を用いている。表紙にはタイトルページのタイトルに「驚くべき」との形容が追記されているが、書誌学的にはタイトルページにあるタイトルが記載対象となる。

12. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつのはなし』

N. メリデュウ

コヴェントリー 1820年頃刊 (チャップブック)

1820年頃の出版にも関わらず、「長形のs」(fに似たsの文字)、つなぎ語(catchword、または補語とも言い、次のページの初語あるいはその一部が、前のページの下部に示されている)が使われている。先述の通り、「長形のs」はおおよそ1800年を境にして使われなくなった文字である。また、本作は、折記号(本文7ページの場合はA4)も印刷されている。どれもこの時期のチャップブックにしては極めて希有なことである。価格が(PRICE ONE PENNY.)との記載があり、この時期でもやはり「ペニー・ヒストリー」よろしく依然として1ペニーのままとなっている。

13. 『シンデレラのおもしろいはなしとガラスのくつ』

J. G. ラッシャー

バンバリー 1820年頃刊 (チャップブック)

オックスフォード州のバンバリーのJ. G. バンバリー版のチャップブックである。父親のウィリアム・ラッシャーの出版業を引き継ぎ、「子供のための半ペニーと1ペニー本」のシリーズなどで子供向けのチャップブックを多く出版した。本作は1820年頃に16作品のシリーズで出版された作品のひとつで、幾分色のついたシュガー・ペーパー(sugar paper)に印刷されている。小口木版の挿絵の一枚には、ラッシャーのイニシャルである「J. G.」が刻まれている。

また、もう一冊は同じチャップブックであるが、製本されていないものである。一枚の用紙の表裏に物語が印刷されている紙葉の状態のものである。2折りを3回繰り返すことで、全16ページの本に出来上がることがわかる。このチャップブックにはその際の折り目があり、「折丁」には綴じ糸を通した穴が数箇所あいている。本の版型を知る上でも貴重な資料である。

挿絵は遠近法、白と黒のコントラスト、影などの陰影などを巧みに使い、小さいスペースながらも立体的に見える工夫が凝らされた完成度の高い出来栄えとなっている。

14. 『シンデレラのはなしと小さなガラスのくつ』

ロンドン:ディーン・アンド・マンディ 1820年頃刊 (チャップブック)

ディーン・アンド・マンディの出版ながら、その代理業者であるA. K. ニューマンも関わったチャップブックである。当時は、子供向けの本に関しては、業者間の協力が頻繁に行われていた。また、英語の表題は非常に珍しいもので、「ガラスのくつ」が”Glass Slippers”と複数形で表示されている。一般に、「ガラスのくつ」は舞踏会の際にシンデレラが落としてしまう片方のくつを象徴し、単数形の Glass Slipper で表示されるのが慣例であるが、この版では意識的に複数形を使ったものと思われる。参考までに、対になっている片方のことを英語では fellow という単語が使われる。『シンデレラ』

でも物語の最後の方で、試し履きをしたシンデレラであるが、その後に物的証拠となるもう片方のガラスの靴を出すことになるが、そのときにこの fellow が使われる。

15. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつの人気のある物語のマーシャル版』

ロンドン:ジョン・マーシャル 1821 年刊 (チャップブック)

「マーシャル版」として有名なチャップブックである。英語の表題は Cinderella ではなく、Cinderilla を使用しているのも、『ペロー童話集』を基底としていることがわかる。しかし、やはり「モラル＝教訓」はなく、活字の大きさ、手彩色による挿絵などを見ると、まさに見て、読んで楽しいチャップブックである。そこにはもはや「モラル」の入り込む余地はまったくない。非常に繊細で、かつ現代的な作品である。魔法を使いシンデレラを舞踏会に送り出してくれる「魔法使いのおばあさん」は、もともとはシンデレラの代母(godmother)であり、妖精(fairy)であるが、本作の挿絵に描かれる「魔法使いのおばあさん」はいかにも魔法を使うような容貌をしている。背景に描かれるお月さまもコミカルに見える三日月になっている。『シンデレラ』のチャップブックとしてはおそらく頂点と位置されるものではないかと思われる。

16. 『シンデレラのはなし、または小さなガラスのくつ』

ダービー:トーマス・リチャードソン 1822 年頃刊 (チャップブック)

地方都市ダービーの地で出版されたものである。このリチャードソンのチャップブックには舞踏会で立ち去るシンデレラの場面の挿絵は見当たらない。この挿絵は仲良くダンスをするシンデレラと王子が描かれている。主役はあくまでも踊るふたりであり、動きを感じさせ、顔の表情に特徴のある表現である。高い天井を感じさせる豪華で装飾豊かな宮殿での舞踏会を彷彿とさせてくれる。英語の表題“The History of Cinderella”の History は「ものがたり、おはなし」の意味で、少し古い言い方である(4番)。本作の特徴のひとつに、タイトルページの左ページにある口絵の下に、本文の文章が一部そのまま載せられているところであろう。本文で使われている魔法を使う場面の数行が本文の活字よりも小さなサイズに変えられて置かれている。しかも本文での該当ページも付けられている。安価に手早く作られたチャップブックにありながら、わざわざこうした工夫を凝らしていることから、出版者はこの物語の一番の見せ場がこの魔法の場面であることを示しているのであろう。ほとんどの読者は魔法が出てくることはわかっているだろうけれど、念のためということであろうか。当時の出版者たちの現場でのやり取りが聞こえてきそうである。

17. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』

エジンバラ:オリバー・アンド・ボイド 1828 年刊 (チャップブック)

スコットランドのエジンバラで出版された、やや大型のチャップブックである。表紙は厚みのある紙葉を使い、がっちりした体裁となっている。挿絵の持つ独特の雰囲気もさながら、本文も入念に吟味したものとなっている。本文の冒頭には「『シンデレラ』は妖精が出てくる素晴らしい物語の一つである。真実味が失われているけれども、子供の読者にとってためになり、また楽しい出来事がたくさん出てくる面白い物語である」の一文が置かれている。こうした物語についての総括的な導入は非常に珍しい。これは『シンデレラ』物語が当時どのように捉えられていたのか、そしてチャップブックの書物としての在り方が変わったことを如実に感じ取ることができる貴重な資料である。チャップブックはその体裁から子ども向けに作られたものと考えがちであるが、もともとは大人が読むものとしてさまざまなジャンルを扱う読み物として登場したものであった。粗末な紙葉に印刷されたものにすぎなかったのである。『シンデレラ』の内容からすぐに子供が読者の対象になってしまうが、であればこそ、表紙を頑丈にして読み返しに耐えられるようになるものも現れるようになった。それがさらに発展すると、絵本になることを実感させるものである。子供を意識しながら、大人の読者も念頭に置いた出来栄えとなっている。価格は 6 ペンスと値上がりしているが、中身は立派な文章ばかりで、非常に格式あるチャップブックである。このエジンバラの本文と挿絵をもとに、後年、アメリカのクーパーズタウンの H. E. フィニーが 1842

年に出版したチャップブック(18番)があるので、是非見比べていただきたい。

18.『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』

H. E. フィニー

クーパーズタウン (アメリカ) 1842 年刊 (チャップブック)

口絵には絵の代わりにアルファベット、数字、記号が並べられ、子供の教育の目的にも利用できるように出版されたものである。しかし、本のサイズが小さいので本文の活字はとても小さく、整然と並んでいる。活字同様、物語の進行も、ほとんど省略されることなく忠実に『ペロー童話集』に従っているオーソドックスな作品である。ところが、このチャップブックはエジンバラのオリバー・アンド・ボイド(1828年)が出版したチャップブック(17番)をそっくりに作り直したものである。この2冊は大きさがまったく異なるので、その類似に気づきにくいですが、実際には本文はそのままに、活字を小さくして、挿絵は中心部分のみを印刷して全体の小型化をはかったものである。チャップブックの世界ではよくあることで、著作権を無視したり、時には物語の内容とは全く無関係の挿絵を使ったり、同じ挿絵が何度も使いまわしをされることが少なかつた。もっとも、そのあたりがチャップブックの大きな魅力の一つとなっていることは言うまでもない。挿絵には魔法使いの代母が登場するので、同じアメリカで出版された T. コリアーのチャップブック(5番)にあったような魔法が出てこない内容ではない。1800年頃のアメリカの状況と1842年のアメリカでは社会状況が異なっていることがわかる点も興味深い。しかしながら、著作権を無視して、使えるものは何でも使う精神は変わっていない。しかしこうしたチャップブックの世界ももうすぐ終わりを告げる時期が近づくことになる。

19.『シンデレラのはなし』

オトリイ: ヨークシャー: J. S. パブリッシング・アンド・ステイショナリー

1850年頃刊 (チャップブック) (韻文)

本来は1冊ずつばら売りにされたチャップブックであるが、本作は全16冊のシリーズをひとつにまとめた装丁になっている。『シンデレラ』は巻頭を飾る作品で、4行か6行の韻文の形式をとっている。黄色の表紙と模様デザインを統一して、シリーズの作品は印刷されており、作品のタイトル毎にその下部の挿絵が変えられている。韻文や散文などもあり、本文の文字の大きさや挿絵の入り方などそれぞれの作品によって異なっている。挿絵は雑ではあるが手彩色が施されている。一番の特徴は魔法使いの代母の描かれ方である。はじめは等身大の大きさであるが、5ページにある代母は空中に浮かぶ雲に乗る小さな姿に描写されている点である。小さな靴を片方ずつ右と左手に持っている。その姿はいかにも妖精であることを意識した描写である。小さな靴を手渡そうとしている場面になるが、靴だけは魔法を使わずに手渡しをするので、真夜中を過ぎても違った姿に変わることがない。読者の中には「なぜガラスの靴だけ何かに変わらないの?」と思う方もいるかもしれないが、しっかりとその点は抜かりなく『ペロー童話集』のときからそのように描かれている。

20.『シンデレラと小さなガラスのくつ』

ロンドン: ディーン・アンド・マンディ 1846年頃刊 (チャップブック)

ディーン・アンド・マンディのもと、非常に優雅な作品が多く出版されたが、本作は『シンデレラ』の新編集版である。その「優雅な」という形容詞には理由がある。実は、子供の読者にふさわしい読み物となるように、女性が編集をし直したものである。本作は珍しい構成で、36ページの本文には挿絵が一枚もない。ところが本文末に、一枚の紙葉を蛇腹に折り畳んで、挿絵をまとめている。本文は文章だけとなるため、パラグラフを小さい単位にして余白を多くとり、読みやすいように工夫が施されている。何とんでも本作の最大の見どころはシンデレラが片方のガラスの靴を落して逃げる場面を描いた挿絵である。先に述べたように、多くのチャップブックでは舞踏会の会場が挿絵になっているが、本作では

大きな階段が配され、下部の踊り場に後ろを振り向くシンデレラ、その2段上にガラスの靴、その数段上に王子が左右に両手を広げるしぐさをしている。また、左方向には時計があり、12時15分頃にもなろうとしている時刻をさしている。王子の「どうして逃げてしまうの?」というような心のつぶやきが聞こえてきそうである。また、真夜中を過ぎるとシンデレラのドレスも普段着に戻るようになるが、その点はしっかりと押さえている。家の中でこまめに働いているときの姿と舞踏会でのドレスを見比べていただきたい。ちゃんと青色のワンピースになっている。手彩色で丁寧に塗られており、挿絵を広げて8枚の挿絵を見るだけで楽しむことができるであろう。

21. 『シンデレラのはなし、またはガラスのくつ』

グラスゴー 1850年刊 (チャップブック)

チャップブックはイングランド以外にも各地で出版されたが、本作はスコットランドのグラスゴーで出版されたものである。紙葉がとても薄いために裏ページに印刷された活字が透けて見えるほどである。本作の最大の特徴は、挿絵が一枚も存在していない点である。挿絵と本文のセットの形式がチャップブックの典型とすれば、そこから逸脱した希有な存在と言える。本作が出版された1850年頃を境にしてチャップブックの人气が急速に衰え、薄手の紙葉に印刷された簡易本はその役目を終えることになる。そのことをまさに実感させる非常にシンプルな体裁である。このチャップブックは『シンデレラ』のチャップブックとしては後半のひとつになるであろう。紙質も粗末で、出版コストを極力かけずに出版することを念頭にしたものであろうと思われる。ここまでの3番から21番までがチャップブックになる。これ以降でもチャップブックに似せて作られるものもあつたが、一般的にはチャップブックと呼ばることがない。時代は絵本へと進化することになる。そこには人の好みの変化だけではなく、産業革命という技術革新や機械化や工業化がまさに充実しているイギリスの姿が見えるようでもある。

22. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』

ロンドン:C. ラウンデス 1804年刊 (韻文)

19世紀初頭においても『シンデレラ』の人气が相当に高いものであつたことを示す格好の実例で、本作は2幕からなるパントマイム劇の台本となっている。台詞は韻文で、登場人物は天上界の神々と地上界の王子やシンデレラなどである。大枠は『ペロー童話集』の系列で、ガラスの靴にぴったりと合う女性を探す内容である。音楽は当時、人気のあつたアイルランドの作曲家マイケル・ケリー(Michael Kelly, 1762-1826)が担当している。1804年の1月3日にイギリス最古の王立劇場であるドルリー・レーン劇場で上演されたとされている。パントマイムは特にイギリスで人気を博した劇の形態で、『シンデレラ』の他にも『眠れる森の美女』、『長靴をはいた猫』などのペローの作品の他に『アラジン』や『ジャックと豆の木』などさまざまな作品が演題にあがつた。クリスマスやイースターなどに上演されることが多かったが、現在でも形を変えて面白楽しくパントマイムが上演されている。日本ではあまり知られていないイギリスの姿のひとつかもしれない。

23. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』

ロンドン:S. アンド・J. フラー 1814年刊 (紙人形付き)

有名なフラーの紙人形(ペーパー・ドール)が一緒になった『シンデレラ』である。ステッチが施されたしっかりとしたスリッパ・ケースに、テキストが収まり、とてもきれいな紙人形が付随した貴重本である。紙人形は手彩色によるもので、極めて手の込んだ繊細優雅な出来栄である。薄手ながら固い材質でできた紙人形を手にしなが、韻文の物語を読み進めることになるが、美術品としての価値を同時に併せ持つ芸術品である。本作は、フラーがペーパー・ドールとして出版した最後のものであり、その神髄を極めた感がある。普段着の洋服、舞踏会でのドレス、羽飾り、四頭立ての馬、結婚式の場面などが描かれている。洋服やドレスに顔を合わせたり、馬車の中央にある窓の空洞の部分にはシンデレ

ラの顔を合わせたり、中央に立つ司祭の前に手を取り合う王子とシンデレラ。そのシンデレラの顔の部分だけが抜かれている。そこにシンデレラの顔を合わせながら物語を語ったのは間違いがない。ひょっとして自分で自分の顔を描き、それを切り抜いて、シンデレラの代わりに置いて想像を巡らした人もいるのかもしれない。さまざまな想像を呼び起こすとてもユニークな作品である。

24. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』

ジョン・ハリス

ロンドン 1825年頃刊 (韻文)

ジョン・ハリスが出版した有名な『シンデレラ』。出版の所在地、ロンドンのセント・ポール・チャーチヤードは、子供の本にとっては最も記念すべき場所で、英国児童書の父と呼ばれるジョン・ニューベリー(John Newbery, 1713 - 1767)が創業地として選んだ場所である。ジョン・ハリスはニューベリーの後継者で、チャップブックとは明らかに一線を画した気品ある高価な作品を手掛けた。25番のグラント・アンド・グリフィス版(c.1850)、26番のグリフィス・アンド・ファラン版(c.1860)、そして27番のパリで出版されたフランス語の『サンドリヨン、または小さなガラスのくつ』(1833)と見比べていただきたい。タイトルページには「妖精」(THE FAIRY.)と題した挿絵が置かれている。雲のように見えるものの上に小柄な代母が両手にひとつずつガラスの靴を持っており、細長い魔法の杖も描かれている。そして、その下部には馬車に変えられる動植物たちがいる。つまり、かぼちゃ一個、ネズミー匹、ハツカネズミ六匹、とかげ六匹が描かれている。それらはまさに『ペロー童話集』やサンバー版に描かれるものと同じである。

25. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』

グラント・アンド・グリフィス

ロンドン 1850年頃刊 (韻文)

ジョン・ハリスの後継者グラント・アンド・グリフィスが、23番のハリス版(c.1825)と同じ挿絵と本文を使用して出版した本。1ページ、6行からなる韻文の脚韻もaabccbと正確に踏んでいる。ハリス版とは活字の組み方が異なり、できるだけ6行で収まるように新しく組み直して、読者が読みやすいように改善が行われている。この出版は、その後、グリフィス・アンド・ファランに継承されることになる(26番)。

26. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』

ロンドン:グリフィス・アンド・ファラン 1860年頃刊 (韻文)

セント・ポール・チャーチヤードで生まれたジョン・ニューベリーの出版社はジョン・ハリス、グラント・アンド・グリフィス、そしてグリフィス・アンド・ファランへと引き継がれることになった。本作のタイトルページにもニューベリー直系の出版者であることが明記されている。老舗の風格を有する出版物で、布地張りの紙葉に印刷されている。グリフィス・アンド・ファランは、その後、当地を離れ、チャリング・クロス・ロードに移り、「ニューベリー・ハウス」と冠し、Griffith Farran & Coの名で出版を続けることになる。

27. 『サンドリヨン、または小さなガラスのくつ』

パリ:オド 1833年刊

本作の最大の特徴は、その挿絵にある。本文はフランス語の散文の物語であるが、挿絵は1825年頃にジョン・ハリス(John Harris, 1756 - 1846)が出版した『シンデレラ』(24番)と全く同じ挿絵が使われている。是非、二つの本を見比べて

いただきたい。イギリスとフランス、国を超えて思わぬ逆輸入が行われたことになる。25番や26番と継承されて出版されていくことから容易に理解されるが、本家となるジョン・ハリスの『シンデレラ』の人気の高さがうかがえる。

28. 『シンデレラ、親指小僧と7リークの靴』

ジョージ・クルックシャンク 画

ロンドン:D. ボーグ 1853 - 54 年刊

イギリスの有名な風刺画家・挿絵画家であるジョージ・クルックシャンク (George Cruikshank, 1792 - 1878) の銅版画をまとめたものである。ディケンズやサッカリーの作品の挿絵はよく知られており、『グリム童話』の英語版の挿絵は傑作と言われている。本作は、クルックシャンク自身が編集した4冊からなる「フェアリー・ライブラリー」(妖精文庫)のうちの2冊、『シンデレラ』と『親指小僧と7リークの靴』の挿絵のプルーフ(試験刷り)をまとめたもので、非常に珍しい作品集となっている。「インディア・ペーパー」に刷られ、丈夫な「カートリッジ紙」の紙葉の糊で全面貼付にマウント(裏打ち)されている。

29. 『シンデレラとガラスのくつ』

ジョージ・クルックシャンク 文、画

ロンドン:D. ボーグ 1854 年刊

G. クルックシャンクが本文の編集と挿絵を手掛けた「フェアリー・ライブラリー」(妖精文庫)(全4巻)の一作の『シンデレラ』である。挿絵のエッチングは見事である。口絵のシンデレラと名付け親の妖精が暖炉に座る場面は、頻繁に引用される傑作の挿絵であり、『シンデレラ』と言えばこの挿絵を思い浮かべる人も多いかもかもしれない。しかしその内容を詳しく知る人は少ないのではないだろうか。それはクルックシャンクが勝手に物語の内容を大きく改作をしたためであろう。彼は当時盛んになっていた禁酒運動に強く賛同し、大胆にもその禁酒を誰もが知る昔物語に取り入れてしまったのである。ここで有名な小説家であるチャールズ・ディケンズが登場する。クルックシャンクとの関係はディケンズがまだ新人のときの作品に挿絵を描いてもらったという良好な関係であった。しかし、さすがに昔物語に禁酒運動を持ち込むという改作の行為には我慢がならず「妖精物語に対する欺瞞」として、強く非難した。このような逸話があるほどにオーソドックスな物語から離れてしまっていることが現在あまり知られていない本作の現状を作っている一因となっていると思われる。その改作について少し触れると、次のようになる。禁酒を持ち出すのは代母である。魔法を使うわけではないが、元の物語にはない創作となる。結婚式を行う際の王様との話し合いでのこと、祝事につきものの民衆に振舞われる「ワインの泉」に代母は反対の意見を述べる。飲酒はケンカや野蛮な行為の原因となり、死人が出ることもあると王様に主張して、最後には説得してしまう。病気や悲惨な不幸や犯罪がともなうという更なる代母の言葉には、クルックシャンクの父親の実体験が含まれているようであるが、こうした改作をもってこの作品の価値がなくなってしまうことは決してないと考えられる。クルックシャンクの他の3つの妖精文庫の作品も本図書館には貴重書として所蔵されている。そちらの挿絵も素晴らしいもので、機会があれば是非にご覧いただきたい。クルックシャンクの挿絵はこうした改作をはるかに凌駕する別次元の魅力が存在する。

30. 『シンデレラとガラスのくつ』

ジョージ・クルックシャンク 文、画

ロンドン:G. ラウトリッジ 1860 年刊

G. クルックシャンクによる本文の編集と挿絵による『シンデレラ』の29番の異版である。タイトルページにはクルックシャンクの肉筆で“To Caroline, Mr Murdo, with the best regards of George Cruikshank. July 5th. 1877”とサインが書かれている。禁酒運動のプロパガンダを織り込む内容となっているが、根強い人気があり、出版者が変わっても出版が

続けられたが、クルックシャンクは当初は4冊だけではなく多くの作品を出版したかったようであるが、叶わなかった。禁酒を入れ込む改作がなければ、彼にしか描けない挿絵を見ることができたに違いないと思うと、残念でしかたがない。

31. 『パークのシンデレラ』

ロンドン: A. パーク 1840 年刊

ロンドンのパーク出版が出した絵本である。表紙もハードカバーではなく、薄手の紙葉からなる絵本である。ページごとに本文と挿絵があり、しかもその割合がほぼ半々となっていて、挿絵の割合が多くなっている。紙葉が薄く裏面に透けてしまうので、片面だけに印刷されている。ページをめくると印刷されていない紙葉が現れることになる。挿絵の手彩色も必要最小限の色付けであるが、これは価格を押さえるためのものと思われる。

32. 『ペローによる妖精の物語』

パリ: E. ブランシャール 1854 年刊

『ペロー童話集』を書き直したフランス語による作品である。タイトルに謳っているように 1697 年の『ペロー童話集』にある8編すべての作品が収められて、それぞれにたくさんの挿絵が置かれている。『サンドリヨン』はオーソドックスな物語の展開であり、本文の後には教訓も据えられている。挿絵には珍しい描き方がなされているところがある。舞踏会でシンデレラがガラスの靴を落すのは、舞踏会の会場内でのものがほとんどであるが、本作ではお城の外、ちょうど門番が立って見張っているその目の前のところに描かれている(p.84.)。シンデレラは先を急ぐことを表現する両手を前に差し出すポーズをとって、後ろを振り返ることもなく前傾姿勢で走っている。この両手を前方に差し出す姿はチャップブックなどでもよく見られるものであるが、ガラスの靴については非常に珍しい描写である。次のページにはやわらかそうなクッションに置かれたシンデレラが落していったガラスの靴が描かれている。高いハイヒールではなく、やはり「スリッパ」に近い形状であることを見ていただきたい。

33. 『シンデレラ』

ハンブルグ: ガスタフ W. ザイツ 1863 年 - 1864 年頃刊 (シェイプブック)

1863 年から 1864 年頃に制作されたと推定される『シンデレラ』の初期のシェイプブックである。シェイプブックは、クリスマスのプレゼントとして子供の靴下に忍ばせることができるように作られた「人形を型取った本」で、暖炉のそばにプレゼントを入れてもらうために子供が靴下を吊るという習慣の実例としては大変古いものである。本作は、ルイス・ブラッグ社のシェイプブックに似せて作られたものである。表紙に鳩に似た鳥が描かれているので、本編の内容は『グリム童話集』の『灰かぶり姫』の系列かと想像してしまうが、実際には『ペロー童話集』に則した内容となっている。しかし物語の最後で、「二人の義姉たちは妬みと恨みのうちに亡くなりました。」とあり、性格の悪い人間の悲惨な最期を示し、性格の良いシンデレラとの対比を明確に描いている。

34. 『サンドリヨン』

パリ: ペルラン 1870 年 - 1880 年代刊 (フランス語)

いかにもフランスで出版されたことを感じさせる絵本である。挿絵が紙面の大半を占め、その下に 4 行か 5 行の文が加えられている。すべてのページが手彩色による挿絵で、その鮮やかな色彩が印象的である。展示される右ページの本文 2 行目に fée とある通り、杖を持った marraine (名付け親 = godmother) は、妖精である。

35. 『シンデレラとおとぎばなし』

ロンドン: アーネスト・ナイスター 1870 年刊

『シンデレラ』を巻頭に、計 16 の作品を集めた大判の再話による本である。19 世紀後半になると、今日でも通じるまさに現代的な絵本の原型が生まれることになるが、本作もその 1 冊である。

36. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』

ロンドン: キャセル、ピーター・アンド・ガルピン 1871 年頃刊

ロンドンのキャセルが出版した絵本である。粗雑な手彩色ながら、絵本の挿絵としての機能は十分に果たしているばかりか、挿絵がページの大部分を占めている。一枚の紙葉に印刷し、見開き一對の紙葉を重ねて、それを 2 折りにした装丁であるため、本編を見開きにすると前半は左側に印刷面が、後半は右側に印刷面が来ることになる。したがって、物語の中間となる 4 ページと 5 ページだけは本編を両開きで読むことができる。本作は、「キャセルの妖精物語本」のシリーズに属し、価格は 6 ペンスで、布地張りは倍の 1 シリングとなっている。

37. 『シンデレラ』

ウォルター・クレイン 画

ロンドン: G. ラウロリッジ・アンド・サンズ 1874 年刊

有名なウォルター・クレイン(Walter Crane, 1845 - 1915)の手になる絵本で、新シリーズの「ウォルター・クレインズ・トイ・ボックス」の中の 1 冊である。遠近法、床の市松模様は伝統様式であり、女性の「つけボクロ」や洋服などのファッション、舞踏会に集まったさまざまな人種の人たちなど、その全体が見事に調和している。一目見て、すぐにウォルター・クレイン作とわかる強烈な個性を持っている。また、この絵に加え、各ページ 10 行からなる文章は、2 行(カプレット)ごとにきちんと脚韻が踏まれている。また、本作と同じ挿絵を用いて、ミュージカル絵本にした異版(38番)があるので、二つを見比べていただきたい。

38. 『子供のミュージカル・シンデレラ』

ウォルター・クレイン 画

ロンドン : G. ラウトリッジ 1879 年刊

有名なウォルター・クレインの画によるミュージカル絵本である。クレインの絵に、文章と曲(楽譜)をつけたものである。チューリンゲン(ドイツ)の民謡やメンデルスゾーンの有名な結婚行進曲などの楽譜も入っている。子供が客間やコンサートで演奏し、楽しめるように工夫された絵本である。

39. 『シンデレラ』

ニューヨーク: マクローリン・ブラザーズ 1876 年頃刊

ニューヨークのマクローリン・ブラザーズが出版したファミリー・ムーンビーム・シリーズの一作。全ページがカラー印刷で、本文の紙葉も厚みがあり、繰り返し読むことに耐えられるハードカバーの立派な現代的な絵本である。代母は小柄で天使のような羽があり空中に浮かび軽やかである。価格は 1 冊 5 セント。同じシリーズには、『親指小僧』や『アラジン』などがある。

40. 『小さなシンデレラとガラスのくつ』

ロンドン: ディーン・アンド・サン 1880 年頃刊

ロンドンの有名なディーン・アンド・サンが出版した絵本。紙葉は裏に布地が貼られたリネン版で、単なる紙葉よりも耐久性に富む。挿絵は全体的に穏やかでやさしいタッチで描かれている。代母は可愛い少女のようである。36 番の作品と同様に、一枚の紙葉に印刷し、見開き一對の紙葉を重ねて、それを 2 折りにした装丁であるため、本編を見開きにす

ると前半は左側に印刷面が、後半は右側に印刷面が来ることになる。

41. 『子供たちのシンデレラ、または小さなガラスのくつ』

ロンドン:ディーン・アンド・サン 1881 年刊

本作は「ディーンのお気に入りのおとぎばなしシリーズ」の一作になる。挿絵は、40番の作品で感じる「可愛さ」はあるものの、大人びた落ち着いた描写になっている。この2作は同時期の出版になるが、作風も変えて同じ作品が作られていることから『シンデレラ』の人気が高かったことを感じ取ることができる。裏表紙には、カラーの図版入りの絵本が 1 冊 6 ペンスと記載されている。

42. 『シンデレラ、四幕仕立ての妖精オペラ』

ジョン・ファーマー 音楽、ヘンリー・S・リー 文、ヘイウッド・サムナー 画

ハロウ:J. C. ウイルビー 1882 年頃刊

ロンドン北西部にあるハロウで出版された 4 幕からなるオペラ仕立ての物語である。韻文のコーラスや歌に、シンデレラや王子の散文の台詞が織り込まれていくが、内容はオーソドックスな物語ではなく、自由な展開が見られるが、物語に則した挿絵が要所に配されている。ジョン・ファーマーはエリザベス朝期の作曲家である。マドリガル集も出版し、教会のオルガニストでもあった。

43. 『3 人の美しいプリンセスたち』

キャロライン・パターソン 画

ロンドン:マクラス・ワード 1885 年刊

表題が示すように、プリンセスとなった美女 3 人が主人公となる物語である。タイトルページの次のページには、エリザ・ケアリーの 16 行の詩が添えられている。シンデレラについては、「金髪の美しいシンデレラ、その小さくて上品な足は、あの有名な靴とぴったりでした」とある。ほかの二つの作品は『白雪姫』と『眠れる森の美女』である。

44. 『シンデレラと二つのギフト』

エドワール・ドゥ・ボーモン 画

ロンドン 1887 年刊

エドワール・ドゥ・ボーモンが、シャルル・ペローの『サンドリヨン』を題材に描いた 33 枚からなる水彩画集である。紙葉は豪華なモロッコ紙が使われている。散文の物語の進行に合わせ、美しく、繊細で、軽やかな世界が描写されている。

45. 『シンデレラ』

フィラデルフィア (アメリカ):B. ウイルムセン 1890 年刊 (仕掛け本 ポップ・アップ)

本作の最大の特徴はページをめくると見開きの中央部分に紙製のハチの巣状のポップ・アップが現れることである。このポップ・アップは非常に繊細な薄手の紙葉製なので、小さな子供が一人で読むには耐えられないかもしれない。舞踏会に行くことができなくて悲しむシンデレラのもとに妖精が立派な馬車と共に現れる。舞踏会に行く馬車は揃っているので魔法を使うことはない。そしてシンデレラに差し出す靴もガラス製ではなく金色の靴である。魔法がないのは同じアメリカで出版された5番のチャップブックと同様である。靴については、チャップブックでは「ガラスに見えるような」という形容を用いているので「ガラスの靴」ではなかった。19 世紀末の時期にあってもいまだに残るアメリカでのピューリタン

の思考を垣間見ることができる。

46. 『シンデレラ、またはガラスのくつ』

ニューヨーク: マクローリン 1890 年頃刊

明らかに子供の読者を対象とした絵本である。リトグラフによる挿絵は、大きくてカラフルで、見開きの中央の紙葉は両ページを一枚の挿絵として用い、大胆な構図をとっている。

47. 『シンデレラ』

ニューヨーク: マクローリン 1890 年頃刊 (仕掛け絵本)

アメリカのマクローリンが出版した仕掛け図版入りの書物で、『アラジン』や『長靴をはいた猫』などのシリーズもののひとつである。図版の前には韻文と散文の物語があるが、本作の見所は、やはり仕掛けの図版である。物語の進行に合わせてページをめくることになるが、そのページのサイズにも工夫が施されていて、全 13 からなる場面はどれも実に楽しいものばかりである。

48. 『シンデレラ』

ニューヨーク: マクローリン・ブラザーズ 1891 年刊

(仕掛け本 パントマイム・トイ・ブック)

プロセニウムのアーチ型という独特の版型をした「パントマイム・トイ・ブック」の絵本である。アーチ型の幕が全体を覆うようになった前舞台の構図をとっている。表紙はオーケストラ・ピットと幕が下りた舞台で、観音開きのページをめくると舞台上で歌い踊るミュージカルが展開されることになる。劇場に行ってきたさんの観客と一緒に『シンデレラ』の舞台演劇を鑑賞する趣向である。

49. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつとジャックと豆の木』

グレース・ライズ

ロンドン: J. M. デント 1894 年刊

ライズは本作の序文で、「昔は、そう、おばあちゃんたちの時代は、今ほど本も本屋も多くはなく、行商人が携えてくる物語本を心待ちにしていたものだった。」と、チャップブックに言及している。19 世紀後半ともなると、チャップブックはまったく過去の遺物となり、人気の高い『シンデレラ』といえどもチャップブックの形では出版されなくなった。本作も小型のサイズではあるが、ハードカバーで、挿絵も洗練されて現代的なアレンジが施されている非常に上品な本となっている。

50. 『シンデレラ』

ロンドン: ディーン・アンド・サン 1899 年頃刊 (仕掛け本 ポップ・アップ)

ロンドンで、子供向けの絵本を多く出版したディーン・アンド・サンが出したポップ・アップの仕掛け本。同社は、トイ・ブックに、初めて耐久性に富むホランド製本の印刷を考案したことでも知られている。本作はシリーズものの第 4 作目にあたる。本作の最大の見せ場は中間部分に置かれたポップ・アップである。ページを見開くと、舞踏会の場面が 4 つに分かれて配されたポップ・アップが突如に登場する。読者は本の「地」と呼ばれる下方を手前にして「天」を後方にして、立体的に作られる舞踏会の会場をのぞき込むことになるであろう。一番奥のポップ・アップにある壁の部分には十二時少し前をしめす時計がかかっており、会場から急ぎ逃げ去ろうとするシンデレラが描かれている。そのすぐ手前のポップ・アップには追いかけてようとする王子と小さな靴が描かれている。その手前には義姉の二人が立ち姿でその場面を見

つめ、そして一番手前には王様とお妃がソファに座ってやはり突然の出来事を見つめている。閉じては開いて、というしぐさを何度も何度も行うに違いない。本文と挿絵はこのポップ・アップの前後にわずかに配されており、読み物としても楽しむことができる。挿絵にはお決まりの動植物が描かれていて、『ペロー童話集』に則した伝統的な物語であるが、シンデレラには「エラ」という名前が付けられて登場する。しかし何といても手の込んだポップ・アップの仕掛けということになるろう。

51. 『シンデレラ』

グリフィス・アンド・ファラン

ロンドン: トークエイ 1900年刊 (韻文)

セント・ポール・チャーチャードで、グリフィス・アンド・ファランが出版した子供のための韻文劇の本である。ト書きも記された、全4場からなる劇で、第2場と第3場の間には間奏曲の楽譜が入れている。

52. 『シンデレラ』

ロンドン: ラファエル・タック 1905年頃刊

本作は、その大きさと装丁から一見チャップブックに思われるが、出版年やその内容からチャップブックの範疇には入らない。チャップブックに似せて作られたものであるが、人形劇の玩具としても使えるトイ・ブックの分類に属する作品である。「タックお父さんの“パノラマ”シリーズ」の一作品で、全4ページの本文の後には、5ページ分の紙人形があり、その人形を立てるスタンドとなる緑色の台紙が揃っている珍しい逸品である。

ラファエル・タックはその妻と1866年に会社を創業し、紙を素材とするグリーティング・カードやポスト・カードを広く扱った。1800年代後半から1900年代初期に起こった「ポストカード・ブーム」もあって、非常に成功を収めた会社である。『シンデレラ』の作品は版を変えて幾つか作られている。本作はお得意の紙を使った人形が付けられているが、そうした背景があったものと思われる。残念なことに第二次世界大戦での「ロンドン大空襲=ザ・ブリッツ」(1940 - 1941)でさまざまなシリーズの貴重なオリジナルの品々が失われることになった。

53. 『シンデレラと眠れる美女』

フレデリック・ウォーン

ロンドン 1905年頃刊

布張の紙葉に印刷された絵本である。表紙には「引き裂くことができない」を意味する UNTEARABLE の文字が見える。大判のサイズであり挿絵は本文があるページにも置かれているが、ページの一葉の前面を使った挿絵が一番の見どころであろう。妖精である代母が現れるが、本作では魔法の杖でシンデレラが身につけているぼろ着をきれいなドレスに履き古した靴をガラスの靴に変えてしまっている。これでは真夜中を過ぎるとガラスの靴も元の姿に戻ってしまうのではないかと心配してしまうが、ちゃんとガラスの靴はそのままとなっている。

54. 『シンデレラ』

エイミー・ステードマン 文

ロンドン: D. P. デント 1900年 - 1910年頃刊 (人形付き)

エイミー・ステードマンの再話によるテキストが1冊あり、それにペギー・バックストンが制作した8体のストーリー・フォーク(Story-Folk)人形が付随した作品である。人形は、厚手の紙製の切抜き絵に台紙がついているので、立たせることができる。デザインと色彩がよく調和した実に美しく、愛らしい紙人形である。丁寧に作られて、表情やしぐさにも注意が払われているので、見ていて時間を忘れるほどである。代母の妖精は三角帽子と魔法の杖がなければシンデレラか

しらと思われるほどである。子供も大人も人形をテーブルに並べて本を読みながら一緒に遊んだことであろう。

55. 『シンデレラ』

ロンドン:ラファエル・タック 1912 年刊 (シェイプブック)

シンデレラの頭部を半円に型取ったシェイプブックである。クリスマスのプレゼント用に、靴下に入れることができるように作られている本である。本文の内容は、シンデレラが可愛がる鳥がドレスと靴を持って来てくれるなど、大きな改作が見られる。

56. 『シンデレラ、または小さなガラスのくつ』

アリス・コーバン・ヘンダーソン 訳

ブランチェ・フィシャー・ライト 画

シカゴ (アメリカ):ランド・アクナリー 1914 年刊

本作は、現代的な絵本の形式をすっかり備えたものである。特徴は、本文を6つのパートに分けて、それぞれに小題を付けて、子供の興味をそそるように工夫されている点である。そして、最大の特徴は、本文末に、「モラル＝教訓」が付け加えられている点である。『シンデレラ』で「教訓」が付けられることはほとんどないので、極めて例外的な作品である。実はこのことを裏書きする表現がタイトルページに記載されている。つまり、アリス・コーバン・ヘンダーソンのより「翻訳」されたものであることがわざわざ明記されているのである。この「翻訳」の意味するところは、本作が『ペロー童話集』の「翻訳」であることを示すことであろう。オリジナルの『ペロー童話集』では二つの「教訓」が付けられているが、本作では短い「教訓」が一つ置かれている。それは「美しさは大切なもの、でもやさしい心はもっと大切。着飾っていても思いやりのない義姉たちより灰まみれのシンデレラの方がずっと美しい。お化粧やつけぼくろよりも立派な振る舞いがずっと大切で、それがあればこそ王妃になることできるのよ。」という内容である。これは『ペロー童話集』にある二つの「教訓」のうちの最初の「教訓」とほぼ同じ内容である。『シンデレラ』が「教訓」付きの昔物語であったことを思い出させてくれる貴重な作品と言える。挿絵の基調は白黒で、所々を朱色に染めて、変化をつけている。

57. 『シンデレラ』

ミリセント・ソワービー 画、ギサ・ソワービー 文

ロンドン:ホッター&ストートン 1915 年刊

ミリセント・ソワービーはイギリス生まれのイラストレーターである。ルイス・キャロル(Lewis Carroll, 1832 - 1898)の『不思議の国のアリスの』挿絵も手掛けている。この作品の著作権が切れた1907年のことであった。落ち着いた色調にあっても軽やかで繊細な描写は実に見事である。そしてギサ・ソワービーは劇作家であり、イラストを担当したミリセントの姉である。フェビアン協会のメンバーであり、フェミニストとして知られていた。子供向けの本だけではなく詩作も手掛けた。しかし本作は子供の為というよりは実に立派な装丁であり、子供だけではなく大人を強く意識して出版されたものと思われる。

58. 『シンデレラ』

アーサー・ラッカム 画、C. S. エヴァンズ 文

ロンドン:ハイネマン 1919 年刊

C. S. エヴァンズの物語文に、アーサー・ラッカム(Arthur Rackham, 1867-1939)が挿絵を手掛けた本である。ラッカムは英国の有名な挿絵画家で、『グリム童話集』(1900)、『マザーグース、なつかしい童話』(1913)など約 90 冊の挿絵を描いた。本作の『シンデレラ』の豪華版は、初版 850 部の限定版である。850 部のうち、525 部は英国の手刷り紙葉を

用い、残り 325 部は局紙(Japanese vellum)を用いたものである。本作は前者に属し、ラッカムの署名と出版ナンバーの 847 が自筆で書かれている。影絵(シルエット)のスタイルをとっているが、基本の黒色の他に多色刷りもあり、どれもが見る者の感性を刺激するものばかりである。サンドリヨンが落してしまうガラスの靴は白抜きに輪郭だけの描写となっている。

59. 『サンドリヨン』

アーサー・ラッカム 画

パリ:リブレリー・アシェット 1919 年刊 (フランス語)

アーサー・ラッカムが挿絵を手掛けたフランス語版の初版である。58 番の作品と比べていただきたい。本文にある挿絵の影絵は同じであるが、58 番の英語版にはあるのに本作には配されていない挿絵もみられる。

60. 『どのようにしてシンデレラは舞踏会に行くことができたのか』

ジェシー M. キング 文、画

ロンドン:G. T. フォーリス 1924 年刊

ジェシー M. キングはスコットランド出身の児童文学の作品で知られるイラストレーターである。挿絵はカラー印刷された小型のサイズにしたものを本体のページの所々に配置しているが、ほかにもキングの絵画作品などが織り込まれている。オーソドックスな『シンデレラ』の物語に則したものもあるが、いくつかは逸脱したものである。代母は godmother との単語を使い、シンデレラのことは godchild を使っている。後者の表現は極めて珍しい。しかも代母はシンデレラの母方の血縁関係にある間柄としている。舞踏会に出かけるまでのやり取りが創作されて描かれている。「いいですか、覚えていてね、このドレスはほかのものと一緒に月曜日の朝の 12 時に洗っちゃだめよ。」といった具合である。『シンデレラ』はさまざまな想像をかきたて、さまざまな創造を起こさせるものである。

61. 『シンデレラ』(ザ・ソフィストケイティッド)

ホランド・ロビンソン 文

マック・ハーシュバーガー 画

私家版 1926 年刊

マック・ハーシュバーガーの挿絵は優雅や優美という形容がよく似合う。黒と白の組み合わせを巧みに駆使し、そのコントラストを強調し、洗練された美的感覚を見る者の感覚に訴える。『シンデレラ』というタイトルに「ザ・ソフィストケイティッド」との副題をわざわざ付したように、まさに洗練された上品な画風である。一度見れば、この挿絵が誰の作品であるかすぐにわかる実に個性的な魅力たっぷりの傑作である。

62. 『シンデレラとほかの妖精物語』

「ザ・ティニー・ウィーニー・ブックス」

ロンドン:オックスフォード・ユニバーシティ・プレス 1929 年刊

小さな豆本である。『シンデレラ』のほかに『眠れる森の美女』などの作品が収められている。なにぶん小さな本であるにもかかわらず、たくさんの作品が一緒になっているので、勢い『シンデレラ』の物語も大胆に変えられている。シンデレラの父親は男爵である。お城で暮らしていたが、再婚した相手が浪費家で貧乏になり、お城を売って小さな家に移り住んだという始まりである。そのあとはほぼペローの物語に準じているが舞踏会に行くのはさすがに 1 回のみである。

63. 『シンデレラ』

マジョリー・ハーディ、エミール・C・ブラッドベリー 文

サンダスキー、オハイオ (アメリカ): ザ・アメリカン・クレヨン 1931 年頃刊

口絵の下にわざわざ「小さな子供が読めるように再話しました」と明記されていることからわかるように大判のサイズで、大きな活字を使い本文が書かれている。しかし挿絵はラッカムのような白黒の影絵もあり、またカラー印刷の大人びた描写のものもある。アメリカで出版された作品であるが、本作では魔法を使い動植物を馬車等に変えている。ドレスは魔法の杖で変えてしまうが、ガラスの靴については手渡したという記述はないので、魔法で変えられたことになるのであろう。真夜中を過ぎてもガラスの靴はそのままであるために代母がシンデレラに手渡すのが伝統的な物語であるので、非常に珍しいものである。

64. 『シンデレラ』

ニューヨーク: ムービー・ジェクター 1934 年頃刊

アメリカ、ムービー・ジェクター製の一枚もののロール・フィルムである。シリーズ番号 105 番。木製の巻軸に幅 10 センチほどのフィルムが巻き付いている。操作方法は不明であるが、上下に並列した形で図版が並んでいる。その上下の図版はほとんど同じであるが、部分的に異なる個所があり、その微妙な差異の動きを楽しんだものと思われる。

65. 『シンデレラ』

L. ワイスガード 文、画

ニューヨーク: ガーデン・シティー・パブリッシング 1938 年刊

ワイスガードはアメリカ生まれの作家でありイラストも手掛けた人物である。イギリスで幼少期を酔過ごし、ニューヨークで芸術を学んだ。シンデレラの父親が再婚したあと数年間は継母や義姉たちはやさしいふりをしたが、父親が亡くなると豹変する。『ペロー童話集』の『シンデレラ』では父親が死亡するという記述は見られないので、これはなぜシンデレラがいじめられるのか、なぜ父親が助けないのかというような読者の素朴な疑問に答えたものになっているのかもしれない。確かに『シンデレラ』にはさまざまな疑問を挟むことのできる脇の甘さがあるように思われるが、それこそ昔物語故のとなればと考えた方が良いのではないかと考える。ガラスの靴に関して代母が魔法を使わずに手渡したという仕掛けだけで十分のように感じている。妖精である代母の登場も、父親がシンデレラの願いを叶えるためにつかわしたと説明する。そのあとは舞踏会が 2 回開かれるオーソドックスな流れになっている。シンデレラはガラスの靴を落とし真夜中が過ぎてもとの姿になるが、その場面をワイスガードは両開きのページを巧みに使って表現している。注目はガラスの靴であろうか。かかとの高いハイヒールとなっている。試し履きのあとにはもう片方の靴も取り出すが、最後はめでたく王子とシンデレラは結婚しました、と締めくくっている。カラー印刷の挿絵はやさしい印象を与えるタッチである。ドレスを身につけている義姉たちの顔を動物にするという珍しい表現も取っているが、全体としては落ち着いた雰囲気漂わせているのではないだろうか。

66. 『シンデレラ』

ロランド・ピム 画

ロンドン: フォールディング・ブックス 1950 年刊 (仕掛け本 ピープ・ショー)

パノラマ、回転画の仕掛け本である。ページをめくると、6つの場面が立体的に現れる。各場面には、6行の物語文がついていて、物語を読みながら、立体的な空間を覗き見る子供とそして大人の姿が思い浮かばれる。三次元の立体映画を観る感覚である。舞踏会は 1 回のみである。非常に限られた分量でのことであるので仕方がないであろう。

67. 『シンデレラ』

ロンドン: コリンズ 1954 年刊 (仕掛け本 パノラマ)

パノラマ、回転画の仕掛け本で、本をめくると次々に 6 つの場面の仕掛け絵が登場する。これには、別冊の挿絵入りのテキストがついていて、その物語の進行に合わせて楽しむことができるものである。立体的で、奥行きのある世界は小宇宙を形成し、見る人の心を捉えて放さない。

68. 『シンデレラ』

ロンドン: バンクロフト 1961 年刊 (仕掛け本 ポップ・アップ)

本を開くと、絵が飛び出してくるポップ・アップ仕掛け本である。発売当時のビニール袋も揃っている。その宣伝文句には、「面白くて！ ためになる！」とキャッチ・コピーが加えられている。本作は、そのうたい文句を裏切ることのない素晴らしい出来栄で、全 8 場面からなるポップ・アップと書物の形となった物語文が見開きでパッと出現する。人気は相当なもので、他にも『赤ずきん』、『白雪姫』などたくさん作品が出版された。物語はオーソドックスな流れではあるが、より劇的な装飾がなされている。代母の登場は突然にシンデレラが煮炊きをする暖炉から炎のほとばしりとともに現れる。シンデレラは驚くが、自分はシンデレラの代母の妖精であり助けにやって来たこと優しく告げる。シンデレラが逃げる場面では、珍しくもお城の外の階段に落してしまう表現をとっている。しかし本作の特徴は舞踏会が開かれる回数が 1 回のみであることである。ディズニーの作品が出たあとということもあろうが、8 場面のみという限られた分量がそうさせているのではないかと思われる。

69. 『シンデレラ』 (ウォルト・ディズニー映画版)

ロンドン: ディーン・アンド・サン 出版年不詳

言わずと知れたディズニーによるアニメーションの映画をもとにして作ったフルカラーの絵本である。映画版ということもあり、ページをめくるとあの美しい音楽と映像が蘇ってくる。今日でも日本語訳のディズニー版が入手可能である。こうした絵本や映画を通して『シンデレラ』に触れて、すっかり魅了された人も少なくないであろう。物語の基本は、やはり『ペロー童話集』にあるが、上記の「はじめの言葉」にも記した通り上映時間の制約などもあつてか舞踏会の回数は 2 回から 1 回へと変更されている。また、シンデレラが履いているガラスの靴は「ハイヒール」となっている点も注目である。

むすびの言葉

一般に「魔法使いのおばあさん」と言われる人は、もともとはシンデレラの代母＝名付け親(godmother)で妖精・仙女(fairy)という設定です。舞踏会に出かける義姉たちをひとり泣いて見送るシンデレラ。代母はそこに突然に登場します。しかしシンデレラは驚きません。代母はキリスト教の世界で洗礼式に立ち会って世話をしてくれる女性のことですから、自分の代母はシンデレラにとって身近な存在であったはずです。私は、『シンデレラ』を長年に渡り調べてきましたが、その本を手にするたびに常々心に思い浮かぶことがあります。いろいろなことを感じるのですが、つきつめると次のようなことになるのかしらと思います。人それぞれに代母や代父のような存在の人物が現れて、窮地を救ってくれる人間がいてくれればいいのということです。きっといるはずだ、いてほしいと願ったりします。そして同時にあの人もこの人もそうだ、そうだったんだ、居てくれたんだと思います。私が『シンデレラ』とつながったのは本学図書館所蔵の貴重書の「チャップブック」が縁でした。本学の図書館は日本でも屈指の図書館となっていますが、その基礎を築かれた図書館員の吉田道彦氏に声を掛けていただいたのが最初でした。すでに退職をされた吉田氏ですが、今も昔も変わらずに本当にダンディな紳士です。今思うとあのときに魔法をかけられたのかしらと思います。「真夜中になる前に・・・」というひと言がありませんでしたから今でも解けずに魔法が続いているような気がします。本当に心から感謝を申し上げたいと思います。シンデレラは義姉たちにいじめられながらも実に快くお世話をします。生来そういう性格だったこともあるようですが、彼女は自分の境遇を受け入れたのだと思います。しかしそういう普段の心根の在り方、やさしさや素直さや努力や自己認識がないと代母は身近に居ても実際には現れてくれないのかもしれないかもしれません。人はさまざまな境遇に生まれます。自分の境遇を受け入れて、ときに乗り越えて生きていかなければなりません。世の中で生きて行く上でとても示唆に富む物語であると思います。先ず自分にいま備わっているものを受け入れると世界が変わって見えるかもしれません。備わっていないもので必要なものは自分で備える努力が必要なようです。そしてときにはひとりひとりが比喩的な表現になりますが、シンデレラを助けてくれた代母のように誰かの窮地を救う人間にならなければならないのかもしれないかもしれません。私もいつかそういう人間になることができればいいと思っていますが、まだまだなれていません。がんばり続けたいと思います。それこそ『シンデレラ』の二つ目の「教訓」に通じることとなります。いろいろなものが備わっていても名付け親の「代父」や「代母」がいなければ役に立たないということが書かれています。人はひとりでは生きていけないということですね。

『シンデレラ』の貴重書展の解題を担当するのは、ミニ展示を含めると3回目となります。これまでと同様に図書館のみなさまには実にご尽力をいただきました。特に、吉田千登世さん、竹信幾久子さん、八巻千波さん、寺島久美さん、小笠原鈴海さん、そして堀はな恵さんには大変にお世話になりました。改めて心より感謝申し上げます。

解説 歯学部 人文科学研究室
学内教授 木村 利夫